

巻頭言

技術の進歩と学会の変容

裕 哲崇

(朝日大学)

日本味と匂学会の前身である味と匂のシンポジウムが発足したのは1967年（昭和42年）とのことで、優に半世紀を超え、60周年も目の前に迫ってきました。私ごとですが、初めて本学会に参加させていただいたのは1987年の第21回味と匂のシンポジウム（長崎大会）からですので、これまで39年間、本学会にはお世話になったこととなります。しかも、当初は、学会の事務局が朝日大学に置かれていたこと、また、インターネット黎明期から長きにわたり本学会の学術広報業務に関与していたことから、各種の事務手続きなども見よう見真似でお手伝いさせていただいておりました。これだけ長い間、この世界におりますと、学会への参加や実施の手法が、その時代の技術の進歩とともに変容していることに気づかされます。本稿では、各時代における技術と学会の変容について私の記憶をもとに記載させていただこうと思います。

まずは、発表抄録の作成方法です。今、学会での発表を希望するとき、その抄録はPCで作成し、ネット上の投稿サイトにアップロードすることで完結してしまいます。私が知る最初期では、指定の（印刷原版には映らない）水色の原稿用紙が、学会誌に同封されていて、そこに黒字で抄録を直接印刷、または貼り付けし、これを大会事務局に郵送するという形式でした。ただ、この形式は、ワープロ専用機が民生化された80年代から90年代初頭の話で、それより少し前の世代の抄録集や発表論文集を拝見いたしますと、手書きの文字、が踊っております。現在のようないんターネット経由で抄録の提出が瞬時に完了するのは、ネットワーク環境が行き渡る90年代の後半から2000年代初旬にかけてとなります。1996年の第30回味と匂のシンポジウム（大阪大会）では、会場の一角に電話回線（モデム）経由でインターネットに接続されたPCが設置され、「インターネットを経験しよう！」というコーナーが設けられました。ここでは、出来たばかりの本学会のホームページの閲覧体験が人気となりました。

発表形式も技術の進歩とともに変化しています。現在の口演発表は、PowerPointを用い、演者の手元のPCからプロジェクターを通してプレゼンテーション画像がスクリーンに映されますが、これも、Microsoft Officeが一般的になった90年代後半からです。それまでは、図やグラフは画ペンを用いて描き、文字はインスタントレタリングで、必要があればスクリーントーンを貼り付け、完成した図は接写レンズ付きカメラでポジフィルムへ撮影し、それをスライドとして用いました。ですので、口演会場には、演者の「次のスライドお願いします。」の声に合わせて、スライドを送る「スライド係」が必須でした。このようにスライド1枚作るのにかなりの時間がかかりましたから、発表準備はかなり前から始める必要があります。なにより、ミスを見つけたら最初から作り直しとなりますし、指導教員から「修正」の指示が出た学生は、徹夜を覚悟する必要がありました。WordやExcelとPowerPointの連携、PhotoShopやIllustratorで簡単に見栄えの良い図が作れる現在からは、隔世の感があります。現在では、時々、発表直前まで会場でプレゼンテーションファイルの見栄えなどを調整している方も見受けられますが、過去には到底そんなことは不可能だったわけです。

ポスター作成は、どうでしょうか？今では、PowerPointやIllustratorで作成したファイルを大判プリンターで出力すれば終了ですが、これらが一般化する前は、文章はワープロ専用機で、図は前述の手書き法で作成し、コピー機などで適当な大きさに拡大したのち、適当な大きさにカットし、カラー画用紙などにスプレーのりで貼り付けるのが主流でした。

学会の運営方法もコロナ禍の経験を経てさらに様変わりしました。ZOOMを利用して遠隔地にいる者同士の会議も簡単になりましたし、なにより、学会そのものが完全オンライン、あるいは、ハイブリッド形式で開催されたことはまだ記憶に新しいところです。今後は、ChatGPTを代表とするようなOpenAIの活用により、論文作成やプレゼンテーションファイルの作り方も変化していく可能性があります。これらの安易な使用は意図せずとも著作権問題や盗用問題などに深く関わる可能性が否めません。今後、私たち研究者はより強い倫理観をもって最新技術を使用することが要求されることになります。

学会も社会の中に存在する限り、その時代折々の文化や技術の影響を避けては通れません。私たち学会員には、その時代時代において先輩方が紡いできた成果に心を馳せながら、その思いや理念を、さらに新しい技術を持つ後世へと引き継いでいく義務が求められているのではないのでしょうか。